

ワーキングペーパー:文化の力フレーム(v0.5)

— 意味のネットワークとしての文化とその生成構造

Culture-Power Framework — Working Paper (v0.5):
Culture as a Network of Meanings and Its Generative Structure

Fujino, Ken (株式会社 N37)

Abstract (日本語)

本稿は、株式会社 N37 が開発している「文化の力フレーム (Culture-Power Framework)」v0.5 版のワーキングペーパーである。v0.4 (DOI: 10.5281/zenodo.17852096, 2025 年 12 月公開) の改訂版にあたる。

文化を「有限な時間と場所において、世界と応答する営みのうちに織りなされる意味のネットワーク」として定義し、そのネットワークを「資源×作用＝力」という生成構造として捉える。環境・関係・技術・歴史・知的の五つの資源に、反復・再生・研磨・共創・適応・翻訳・異和の七つの作用が働くことで、環境・関係・技術・歴史・知の五つの力が立ち上がる。

v0.5 の主な改訂は以下のとおり。第一に、文化の定義を「意味のネットワーク」として明示化した。第二に、力の生成構造を D 層 (密度層: 資源×作用→同種の力) と C 層 (結合層: 力×作用→異種の力) の二層として構造化した。第三に、観測枠組みを RDC 分析として拡張し、R (埋蔵量) を独立の軸として加えた。第四に、知の力の三軸を「コンセプト／倫理／美意識」に更新した。

本稿は暫定版であり、今後の実践と研究を通じて更新される。

差し替え更新 (2026-05-03) : 初回公開 (2026-04-26) 後、v0.4 まで設けていた「第 8 章 文化の成長プロセス (萌芽期・生成期・成立期)」を削除した。段階区分は結合度 C (0~5) の値帯で同等以上の解像度をもって表現できるためである。バージョン番号・DOI は変更しない (差し替え版)。

Abstract (English)

This working paper presents version 0.5 of the Culture-Power Framework, developed by N37, Inc. It is a revision of v0.4 (DOI: 10.5281/zenodo.17852096, published December 2025).

Culture is defined as “a network of meanings woven within acts of responding to the world, in a finite time and place,” and this network is captured through a generative structure of “resources × functions = powers.” Five resources (environmental, relational, technical, historical, intellectual) interact with seven functions (repetition, regeneration, polishing, co-creation, adaptation, translation, dissonance) to give rise to five powers (environmental, relational, technical, historical, intellectual).

Version 0.5 introduces four principal revisions. First, the definition of culture itself is made explicit as a “network of meanings.” Second, the generative process of powers is structured into two layers: a Density Layer (resource × function → power of the same type) and a

Connectivity Layer (power × function → power of a different type). Third, the observational framework is extended to RDC analysis, in which Reserve (R) is made an independent axis alongside Density (D) and Connectivity (C). Fourth, the three axes of intellectual power are revised to concept, ethics, and aesthetics.

This paper is a working draft and is expected to be further updated through practice and research.

Replacement update (2026-05-03): After the initial release (2026-04-26), the chapter on the three-stage growth process of culture (emergence, formation, establishment), which had been retained from v0.4, was removed. The same gradation is more finely captured by the value range of Connectivity (C: 0–5). The version number and DOI remain unchanged (replacement edition).

Changelog (v0.4 → v0.5)

本稿 v0.5 は、v0.4 (DOI: 10.5281/zenodo.17852096, 2025 年 12 月 8 日公開) を前提としない自己完結の改訂版である。主な変更点は以下のとおり。

新規追加

- 文化の定義を「意味のネットワーク」として明示化 (第 2 章新設)。従来は「資源×作用＝力」の生成構造が前面にあり、対象としての「文化」そのものの定義は v0.4 では暗黙に残されていた。v0.5 では、辞書的定義・文化人類学的定義・語源を概観したうえで、N37 の定義として「文化とは、有限な時間と場所において、世界と応答する営みのうちに織りなされる意味のネットワークである」を明示する
- 生成の二層構造 (D 層・C 層) を導入 (第 3 章／第 7 章)。v0.4 の「D/C 分析」は二つの観測軸としてのみ示されていたが、v0.5 では生成プロセス自体を D 層 (資源×作用→同種の力) と C 層 (力×作用→異種の力) の二層として構造化する
- RDC 分析への拡張 (第 7 章)。従来の D (密度)・C (結合度) に加え、R (埋蔵量／Reserve) を独立した観測軸として明示。資源がどれだけあるか、という量的側面を D・C とは異なるレイヤーに位置づける
- 参考文献セクションを新設。v0.4 では付されていなかった
- 図表を複数追加。v0.4 は全編テキストのみ

なお、本フレームを実装した診断パイプライン (ヒアリング・要約・JSON 分析・合致度診断等) は N37 社内の運用資産として別に維持されている。本稿ではその存在に簡潔に言及するにとどめ、運用詳細は扱わない (v0.4 と同様の扱い)。

定義の更新

- 知の力の定義を更新：v0.4 「真・善・美」→ v0.5 「コンセプト (ビジョン) ／倫理／美意識」。真・善・美は古典的三価値で普遍性が高い反面、実運用で地域・事業の知の力を読み解くには抽象度が高すぎるとの判断。コンセプト・倫理・美意識の三軸は、現場の言葉で資源から汲み取りやすく、診断時の判定安定性が向上
- D 段階・C 段階の表現を D 層・C 層の構造と整合する形に改訂

維持

- 5 資源（環境・関係・技術・歴史・知的）×7 作用（反復・再生・研磨・共創・適応・翻訳・異和）×5 力（環境・関係・技術・歴史・知）の基本構成

差し替え更新（2026-05-03）

初回公開（2026-04-26）後、以下の差し替えを行った。バージョン番号・DOI は変更しない。

- 第8章「文化の成長プロセス（萌芽期・生成期・成立期）」を削除。v0.4 以来「萌芽期・生成期・成立期」の三段階で整理してきたが、この区分は結合度 C（0～5）の値帯と意味記述で同等以上の解像度をもって表現できるため、独立章としては冗長と判断した。今後は RDC 分析（第7章）の枠組みのなかで、C の値帯として文化の現在地を語る
- 基本式 $P = f(D \times C)$ を削除。v0.4 以来「文化の力 = $D \times C$ 」として独立変数 P で表してきたが、文化の力は埋蔵量 R・密度 D・結合度 C の三軸（RDC 分析）を重ねて立体的に観測する枠組みへと整理した。P という独立変数は不要となり、RDC 分析そのものが文化の力の観測である

第 1 章 背景と目的

1.1 本稿の位置付け

本稿は、株式会社 N37 が開発している「文化の力フレーム (Culture-Power Framework)」v0.5 版のワーキングペーパーである。v0.4 (DOI: 10.5281/zenodo.17852096、2025 年 12 月公開) の改訂版にあたる。

文化の力フレームは、地域・組織・プロジェクトにおける文化の生成力を分析・設計するための概念的・実践的な枠組みとして、N37 が継続的に開発してきたものである。v0.4 では、従来「N37 フレーム」と呼んでいた枠組みの名称を「文化の力フレーム」に改め、文化を「資源→文化資本→価値」という循環構造ではなく、「資源×作用＝力」という生成構造として明示した。

本稿 v0.5 は、この生成構造を継承しつつ、定義と観測枠組みの整理を進めた暫定版である。

1.2 v0.4 からの改訂の骨子

v0.5 の主な改訂は次の 4 点である。

- 文化の定義を「意味のネットワーク」として明示化した
- 力の生成構造を D 層（密度層：資源×作用→同種の力）と C 層（結合層：力×作用→異種の力）の二層として構造化した
- 観測枠組みを RDC 分析として拡張し、R（埋蔵量）を独立の観測軸として加えた
- 知の力の三軸を「コンセプト／倫理／美意識」に更新した

あわせて、参考文献セクションと図表を新設した。変更点の詳細は冒頭の Changelog に記す。

1.3 本稿の構成

本稿は以下の順序で構成される。

- 第 2 章：文化の定義
- 第 3 章：文化の力フレームの全体像
- 第 4 章：資源の定義（5 つの有限性からの導出）
- 第 5 章：作用の定義（有限な経験の 3 条件からの導出）
- 第 6 章：力の定義（5 つの力）
- 第 7 章：RDC 分析（埋蔵量・密度・結合度）
- 第 8 章：活用の方向

本稿は暫定版である。今後の実践と研究を通じて更新される。

第2章 文化の定義

2.1 定義の多様性と N37 の視座

文化は、多面的な概念である。辞書では「人間の知的洗練や精神的進歩」とするものもあれば、「人間の生活様式の全体」とするものもある。文化人類学ではタイラー以来、社会成員が学習・共有・継承するあらゆる能力と習慣の総体として扱われ、社会学・経営学・政策の場面ではそれぞれ照準が異なる。ひとつの定義に収まらない難しさは、「文化」という言葉自体の歴史的な厚みを反映している。

これほど多くの意味が一つの言葉に詰め込まれている背景には、文化を「どこから見るか」という視座の違いがある。視座は、対象の広さ（狭義／広義）と時間の向き（静的／動的）の2軸で平面化できる（図1）。左下は芸術遺産・文化財、左上は芸術・教養の創造的活動、右下は民族誌的に記述された生活様式、右上は日々の営みとして生まれる生活文化。同じ対象も視座によって異なる姿を見せる。

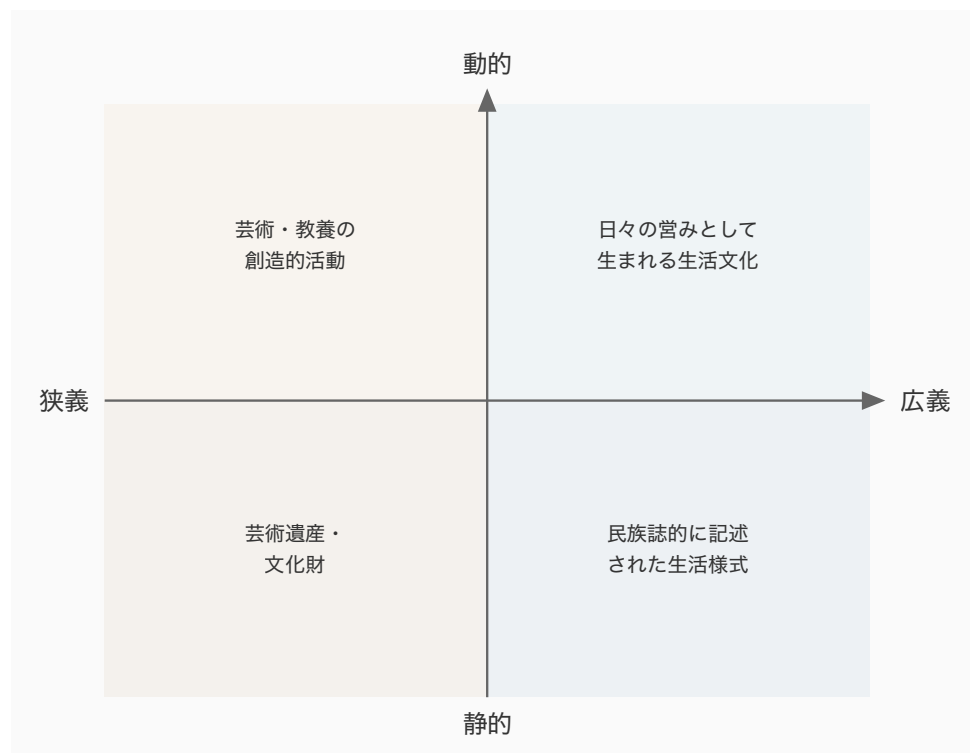


図1: 文化の4象限マップ

N37は、主として右上の視座から文化を見る。広義かつ動的、つまり営みという角度からである。2010年代以降、国の文化政策も芸術を起点としながら生活文化・地域・産業・観光へと対象を広げており、社会全体の関心もこの方向と重なりつつある。

2.2 意味のネットワークとしての文化

文化を営みとして見る視座に立ったとき、文化の本体はどこにあるのか。

エルメスの「ハウスコード」は、素材・色彩・構造・馬具由来の記号を貫く設計言語だが、マニュアルには書かれていない。書けないのである。エルメスの工芸学校が掲げるのは「マニュアルに頼

らない身体記憶の継承」であり、ハウスコードは、革を裁つ手の動き、サドルステッチの糸の張り方、スカーフの配色、オレンジボックスの質感など、何を良しとするかという **共通感覚の総体** として受け継がれてきた。

江戸の化政文化にも、「粋か、野暮か」という共通感覚があった。質素を旨とせよという制約のなかで、人々は裏地や見立てといった一見ではわからないところに美意識を仕込ませた。それは同時代の人に共有された感覚であり、着物・浮世絵・俳諧・食事・会話のあらゆる領域を貫いていた。こうした共通感覚の総体が「文化」と呼ばれるものであり、それを構成しているのが「意味のネットワーク」であると本稿は捉える。以上を踏まえ、本稿は文化を次のように定義する。

文化とは、有限な時間と場所において、世界と応答する営みのうちに織りなされる意味のネットワークである。

「世界と応答する営みのうちに」とは、このネットワークが、環境や歴史、人や技術、知と相互に影響し合う動的なプロセスのなかで織りなされていることを示す。文化は完成したものではなく、世界との応答のなかで更新され続ける。「有限な時間と場所において」とは、抽象的な意味の体系が宙に浮いているのではなく、場所・時代・身体に結びついた意味のネットワークが成立していることを指す。

次章以降で扱う「文化の力フレーム」は、この視座に立った実装である。

第3章 文化の力フレームの全体像

3.1 基本構造：資源×作用＝力

前章で、文化を「意味のネットワーク」として定義した。では、そのネットワークはどのように成立し、どのように観測できるのか。

文化の力フレームは、文化を「資源×作用＝力」という生成構造として捉える。すなわち、文化の営みの基層には、環境・関係・技術・歴史・知といった5つの資源があり、これらの資源に反復・再生・研磨・共創・適応・翻訳・異和といった7つの作用が働くことで、5つの力（環境の力・関係の力・技術の力・歴史の力・知の力）が立ち上がる。この構造は、文化を「生成されるもの」として見ることを可能にする。

力は、資源の直接の属性ではなく、資源と作用の組み合わせの結果として立ち上がるものである。資源・作用・力それぞれの具体的な定義は、第4章・第5章・第6章で扱う。本章では、これらが組み合わさってどのような構造を成すかを述べる。

3.2 R・D・Cの3軸：埋蔵量・密度・結合度

文化の力フレームでは、この生成構造を3つの軸で観測する。

埋蔵量 R (Reserve) は、資源そのものの量を示す。環境資源・関係資源・技術資源・歴史資源・知的資源が、それぞれどれだけ存在しているか。Rは生成の前提条件であり、後述するD・Cとは異なるレイヤーに位置する。資源が存在しても作用が働かなければ力は立ち上がらないため、Rが大きいことは直ちに力の大きさを意味しない。しかし、Rの制約は力の上限を規定する。v0.5では、このRを独立の観測軸として明示し、資源の量そのものをD・Cと区別して位置づける。

密度 D (Density) は、力の厚みを示す。資源と作用の組み合わせが、どれだけ重なっているかを見る。Dは5つの力それぞれについて観測される。

結合度 C (Connectivity) は、複数の力のつながりを示す。異なる力のあいだの連関が、どれだけ成立しているかを見る。Cは、5つの力のあいだの関係として観測される。

RDCの3軸によって、文化の力は量的・構成的に観測可能になる。Rは基層を、Dは厚みを、Cは結びつきを測る。次節では、DとCが生じる仕組みを、生成の二層構造として示す。

3.3 生成の二層構造：D層とC層

密度Dと結合度Cは、それぞれ異なる層の働きから生じる。

D層 (Density 層) は、資源に作用が働いて同種の力が生じる層である。環境資源に作用が働けば環境の力が、関係資源に作用が働けば関係の力が生じる。資源と力の種類は一致する。「同じ種類のなかでの厚み」として、密度Dが観測される。

C層 (Connectivity 層) は、D層で立ち上がった力に作用が働いて、異なる種類の力へと接続していく層である。例えば、歴史の力に翻訳作用が働いて関係の力に接続する、環境の力に共創作用が働いて知の力に接続する、といった力の連関を示す。「異なる種類のあいだの結びつき」として、結合度Cが観測される。

D層で力が立ち上がり、そのうえでC層の連関が成立する。文化の力は、D層の厚みとC層の結びつきが重なり合った多層的な構造として見える。ある力が他の力とどの方向にどれだけ結びつくかは、対象の文化ごとに固有であり、そこに文化の独自性が現れる。

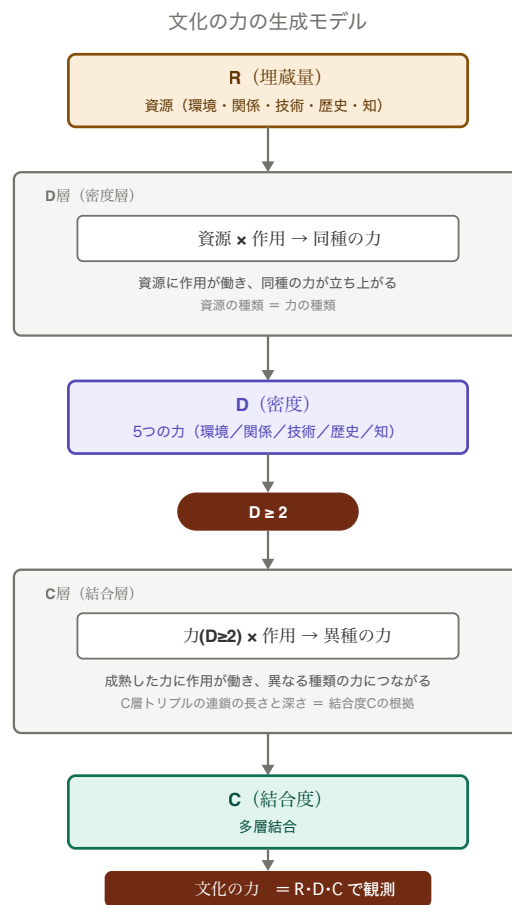


図 2: 文化の力の生成モデル

3.4 文化の力の観測枠組み

以上をまとめると、文化の力は、埋蔵量R・密度D・結合度Cの三軸を重ねて立体的に観測される。Rは資源の厚み、Dは個別の力の厚み、Cは力どうしのつながりを示し、これら三軸を統合した枠組みが **RDC 分析** である（詳細は第7章）。

この観測枠組みの背景にある核心となる考え方は三つある。第一に、どの要素がどう組み合わせられているかという構成を見ること。第二に、同じRDC値に至る経路は多様であるという **等結果性**。第三に、地域や事業者を構成の相違として見ることで **独自性を明らかにする** こと。

これら三つは、ロウ&シュネッグ (Lowe & Schnegg, 2020) が『Comparing Cultures』の序論で提示した「コンフィギュレーショナルな比較」(configurational comparison)の方法論と重なる。コンフィギュレーショナルな比較とは、大規模サンプルで変数間の相関を見る変数ベースの比較と、一つの文化を深く描く厚い記述の「あいだ」に位置づけられる第三の道であり、少数のケースを共通の概念装置で分析し、構成パターンの多様性を記述する方法である。文化の力フレームは、この比較方法論の実践的な枠組みとして位置づけられる。5つの資源・7つの作用・5つの力という共通の座標系によって、対象ごとに固有の構成(コンフィギュレーション)を記述し、独自性を比較可能にする。

第4章 資源の定義：5つの有限性からの導出

4.1 資源とは何か

資源とは、人々の営みにおける与件である。それらは当たり前のものとしてあり、作用が働きかけることで動き出す。文化の力フレームでは、資源を5つの類型に分類する。技術資源、環境資源、歴史資源、関係資源、知的資源である。

これらの資源は、私たちの有限性と関係している。技術は身体の有限性、環境は空間の有限性、歴史は時間の有限性、関係はつながりの有限性、知は認識の有限性に対応する。

資源	有限性	概要
環境資源	空間の有限性	人の活動を成り立たせる空間的・自然的・社会的な条件
関係資源	つながりの有限性	人と人、人と場のあいだに生まれる、ゆるやかな結びつきの芽
技術資源	身体の有限性	生活や生産のなかで培われ、共有・継承されてきた実践知
歴史資源	時間の有限性	時間の中で蓄積されてきた、人々の営み・記憶・制度・物語
知的資源	認識の有限性	共同体のなかで暗黙のうちに共有されている、ものの見方・感じ方・判断の傾向

表 1: 5つの資源と対応する有限性

4.2 環境資源 — 空間の有限性

環境資源とは、人の活動を成り立たせる空間的・自然的・社会的な条件を指す。地形や気候といった自然環境に加え、土地の利用、道路や水路などの基盤、制度や慣習といった社会的な枠組みも含まれる。これらは主体の意思では動かしにくい外在的な前提条件である。解釈や関わり方が変わることで、新しい文脈として立ち上がる可能性をもつ。

特性：

- ・ **外在性・所与性**：主体が選べない。地形、気候、制度はそこにある
- ・ **基層性**：他の資源や活動の舞台になる。関係も技術もこの上で成り立つ
- ・ **両義性**：制約にも機会にもなる。環境の力における「前提の反転」の根拠

事例：雪国の生活文化における豪雪という制約条件、都市再生の取り組みにおける老朽化した建築群・制度的制約、農村景観の保全活動における棚田・水系・集落配置、産業構造転換地域における経済変動・市場環境の変化、企業の事業環境の変化における法制度の改正・市場構造の変動。

4.3 関係資源 — つながりの有限性

関係資源とは、人と人、人と場のあいだに生まれる、ゆるやかな結びつきの芽を指す。安定した関係や制度的な枠組みには至っていないが、接触の機会、共有される場、曖昧な関心といった要素がすでに存在している状態である。明確な意図や成果を伴わず、偶発的・探索的な交わりが可能な条件が整っていることが特徴である。

特性：

- ・ **対人性**：人と人、人と場の「あいだ」にのみ存在する。個人の内部にも物理的空間にも還元できない

- ・ **偶発性**：意図的に設計しにくく、偶然の接触や出会いから生まれる
- ・ **脆弱性**：接触が途切れると失われやすい。環境資源や歴史資源に比べ、維持に反復的な接触を必要とする

事例：地域イベントや市民講座、カフェやコワーキングスペース、オンラインコミュニティ、移住者と地元住民の接点、商店街や朝市の日常的なやりとり。

4.4 技術資源 — 身体の有限性

技術資源とは、生活や生産の中で培われ、共有・継承されてきた実践知を指す。手技・作法・工程・判断といった身体的・手続き的な知識に加え、道具・器具・装置、記録・記述なども含まれる。近年では、AIやデジタル技術のように、知的資源と接続して自己更新する技術体系もこれに含まれる。これらが個人や狭い関係の中に留まり、言語化・共有・制度化が十分に進んでいない段階を指す。

特性：

- ・ **身体性**：身体の動作や手順に埋め込まれている。言語や概念ではなく、「やり方」として存在する
- ・ **環境応答性**：素材・気候・道具など、対象の条件に応じて変化する。ローカルな条件への適応を含む
- ・ **外在化可能性**：道具・記録・制度を通じて身体の外に取り出せる。知的資源との接点をなす

事例：伝統工芸における手技・道具・型、料理文化における素材の選定・調理法・盛付け、ものづくりにおける設計・製造工程・素材加工の技術と意匠、醸造における発酵管理・仕込み手順・気候に応じた判断、デジタル・情報技術におけるプログラム・アルゴリズム・データ処理。

4.5 歴史資源 — 時間の有限性

歴史資源とは、時間の中で蓄積されてきた人々の営み・記憶・制度・物語を指す。建築や道具などの物的痕跡、行事や作法などの制度的痕跡、語りや伝承などの言語的記憶がこれにあたる。これらは過去の時間が凝縮された層であり、再び参照・活用されうる可能性をもつ。

特性：

- ・ **不可逆性**：時間は巻き戻せない。過去の営みは再現できず、痕跡としてのみ残る
- ・ **蓄積性**：世代を超えて層状に堆積する。新しい層が加わっても、古い層は消えない
- ・ **両義性**：重荷にも抛り所にもなる。歴史の力における「いまに活かせるアーカイブ」の根拠

事例：歌舞伎における演目・台本・演出記録、名跡・家芸の系譜、京都の町家における建築様式・暮らしの作法、江戸の出版文化における版木・板元台帳・旧作の蓄積、エルメスにおける馬具製造の技術的系譜、職人の徒弟制度の痕跡、老舗旅館の建物・調度・接客作法、宿帳や献立の記録。

4.6 知的資源 — 認識の有限性

知的資源とは、共同体のなかで暗黙のうちに共有されている、ものの見方・感じ方・判断の傾向を指す。地域に根づいた言葉や言い回し、物語や伝承、漠然とした価値観や美意識、記号や象徴がこれにあたる。これらはまだ概念や理念として体系化されていないが、人々が「あたりまえ」として前提にしている共有の感覚として存在する。

特性：

- ・ **非物質性**：手で触れられない。言葉・物語・価値観として存在し、物理的な形をもたない

- **共有依存性** :個人の頭の中にあるだけでは資源にならない。共同体で共有されることで初めて素材として存在する
- **両義性** :束縛にも創造の源泉にもなる。知の力における「見方・判断・ふるまいを方向づける枠組み」の根拠

事例：江戸の化政文化における戯作や俳諧に通じる言葉遊びの感覚、粋・野暮の共有感覚、ウィーンのカフェ文化における長居を許容する時間感覚、対話を重んじる共有の構え、サンセバスチャンの美食文化における食に対する探究心、素材と調理への共有されたこだわり、地域の祭礼文化における由来の語り、作法やしきたりの共有感覚。

第5章 作用の定義：有限な経験の3条件からの導出

5.1 作用とは何か

作用とは、有限な存在が、有限な環境の中で、経験を動かす働き の型である。資源に作用が働くことで、力が生じる。文化の力フレームでは、作用を7つの類型に分類する。

7つの作用は、有限な存在が経験を動かす方向である。有限な存在の経験は、3つの構造的条件をもつ。時間の中にあること、程度をもつこと、境界をもつこと。

- ・ **時間軸の操作**：過去に向かう操作（再生）、現在を維持・蓄積する操作（反復）、未来の変化に対応する操作（適応）
- ・ **質の操作**：内側に向かって深化させる操作（研磨）、外側に向かって拡張する操作（共創）
- ・ **境界の操作**：異なる体系間を接続する操作（翻訳）、境界そのものを揺さぶる操作（異和）

作用	軸	概要定義
再生	時間（過去）	眠っていた形式・記憶を再稼働させる
反復	時間（現在）	文化を維持・継続する
適応	時間（未来）	変化に対応して調整・更新する
研磨	質（深化）	磨き上げ研ぎ澄まし、本質を際立たせる
共創	質（拡張）	新しい関係や創造を生む協働
翻訳	境界（接続）	異なる体系や文脈をつなぎ、共通理解へ変換する
異和	境界（揺動）	異質な出会いによる転換

表 2: 7つの作用と有限性の軸

5.2 時間軸の作用：再生・反復・適応

再生：眠っていた形式・記憶・技術を、現在の条件に合わせて再び動かす働きである。歴史資源、技術資源、環境資源に働きかける。再生作用は、過去の形式や記憶を再稼働させ、それを媒介に異なる力を結びつける働きを担う。例：京都の町家文化において、町家の空間の型・作法（歴史）、気候・土地の制約（環境）、大工技術・しつらえの技（技術）が再生を通じて現代の用途に接続され、複数の力の連関が回復した。

反復：行為・工程・関係・語りを繰り返すことで、文化を安定的に維持・継続させる働きである。技術資源、関係資源、環境資源に働きかける。既に成立した力の連関を、実践のなかで持続させる。例：歌舞伎文化において、型・演目・作法が稽古と上演の反復を通じて維持され、技術の力・歴史の力・知の力の連関が持続している。

適応：環境や社会の変化に応じて、営みや仕組みを調整し更新する働きである。環境資源、技術資源、関係資源に働きかける。変化を前提に、暮らしや仕組みの運用ルールをつくり替え、文化が続く条件を整える。例：ナパのワイン文化において、区画ごとの栽培最適化や気候変動対応の品種開発など、環境変動を前提にした運用ルールが力の連関を維持している。

5.3 質の作用：研磨・共創

研磨：行為・技術・表現・制度を磨き上げ、余分を削ぎ落とし、本質を際立たせる働きである。技術資源、歴史資源、知的資源に働きかける。翻訳・共創・異和によって成立した関係や制度を、現場で運用可能な水準に整える働きである。例：サンセバスチャンの美食文化において、異和で生じた革新的技術を、研磨が試作・検証を通じて再現性と体系性を備えた調理法として定着させ、技術の密度を高めている。

共創：異なる主体が協働する過程で、新たな関係性や仕組みを生む働きである。単なる分担ではなく、相互のやり取りが重なり合うことで、予想していなかったアイデアや関係が立ち上がる。関係資源、技術資源、知的資源に働きかけ、力の連関を生む場をつくる。例：サンセバスチャンの美食文化において、シェフのラボや食の大学など共同研究・教育の場から革新的な技術が生まれ、美食を軸に観光・学問・経済など異領域の力が連関している。

5.4 境界の作用：翻訳・異和

翻訳：異なる制度・文化・専門領域のあいだで、価値や知識を行き来させる働きである。背景の異なる体系どうしを照らし合わせ、相互に理解できる構造や表現へと置き換える。知的資源、技術資源、環境資源に働きかける。すでに立ち上がった諸力を共通の言語や枠組みで結び合わせる。例：ナパのワイン文化において、区画ごとの栽培知がAVA制度（原産地呼称・地図化）として言語化され、環境の力と知の力の結合度が上昇した。

異和：本来は結びつかない要素が出会い、摩擦や緊張を生みながら、新しい秩序や価値を生む働きである。既存の体系の中に異質な要素が入り込むことで、慣れや固定観念が揺さぶられ、文化が更新される。技術資源、関係資源、知的資源に働きかける。単なる違和感や対立だけでは異和作用とはみなさず、その後に「新しいルールや場の立ち上がり」が確認できる場合のみ異和作用として記述する。例：サンセバスチャンの美食文化において、伝統技法と「料理＝科学」という異質な視点の衝突から、分子ガストロノミーという新しい価値観が生まれ、技術の力と知の力の結合が強化された。

第6章 力の定義

6.1 力とは何か

力とは、資源に作用が働いた結果として立ち上がるものである。5つの資源に対応して、5つの力がある。環境の力、関係の力、技術の力、歴史の力、知の力である。

文化の力とは、意味のネットワークが、環境・関係・技術・歴史・知の5つの位相で立ち上がり、埋蔵量 (R)・密度 (D)・結合度 (C) の三軸によって観測される構造を指す。文化の持続力・生成力・独自性を支える構造であり、単なる成果物や象徴ではなく、複数領域の力が同時にはたらき、秩序をもって結ばれた状態として観測される。

文化の力が成立するためには、次の3つの条件が揃う必要がある。

- ・ **多層性 (Layeredness)** : 環境・関係・技術・歴史・知の5領域が同時に動き、複数の時間軸・空間軸で作用していること
- ・ **密度形成 (Internal Density)** : 諸力の内部で反復・再生・研磨・適応が続き、知や作法が厚みをもつこと
- ・ **多層連結 (Cross Connectivity)** : 異なる諸力の間で共創・翻訳・異和が働き、領域を越えた接続が生まれていること

以下、5つの力を個別に述べる。

6.2 環境の力 — 未来をひらく文脈

環境の力とは、空間・風土・社会的条件が、制約ではなく文脈として機能し始めた状態を指す。環境そのものは変わらないが、その見方を転換し、現代的な文脈に接続して読み替えることで、環境資源は環境の力へと転化する。

成立条件：

1. **前提の反転** : 制約や障害として見られていた環境条件が、創造や価値の契機として読み替えられている
 2. **環境と人の往還** : 再解釈が一度きりでなく、空間・素材・制度と人の行為の間で反復的なやり取りが続いている
 3. **文脈の共有** : 再解釈された環境の見方が、個人の発想に留まらず、複数主体に共有されている
- 以上がすべて揃うとき、環境の力として認定する。

例：ナパのワイン文化において、区画ごとの土壌・気候の違いが「テロワール」という文脈として読み替えられ、生産者・教育者・訪問者をつなぐ共通の足場として機能し続けている。

6.3 関係の力 — ゆるやかな共在・共創

関係の力とは、異質な他者が継続的に関わり続けることで、単独では起きない創造・学習・変容が起きる場である。ゆるやかな共在から協働的な共創まで幅をもつ。

成立条件：

1. **継続的な共在**：一時的でない、反復的な関わりが存在している。再訪・常連性・定期的な場・長期的関与など、時間の中で関係が持続している
2. **探索的な関わり**：成果や効率に還元されない、探索的・試行的なプロセスが存在している。目的が未完のまま共有される関わり、偶発的な対話、試行錯誤の許容を含む
3. **相互的な信頼**：単なる取引を超えた信頼関係が存在している。他者と距離を保ちながら共に居られる安全性、互いの存在が創造や学習を促す相互依存を含む

以上がすべて揃うとき、関係の力として認定する。

例：サンセバスチャンの美食文化において、シェフや生産者が継続的に往来し、レシピ公開や共同実験を通じて探索的に関わり合い、競争よりも共有を優先する信頼関係が、技術・知・生活を横断するネットワークを形成している。

6.4 技術の力 — 響き合う応答精度

技術の力とは、素材・環境・人に対する技術的な応答が、対象の条件に合わせて精度を高め、持続的に更新されている状態である。

成立条件：

1. **対象への応答精度**：素材・環境・人の条件に対する感知・判断・調整の精度が高まり、技術が洗練され、あるいは革新性を帯びている
2. **主体間の応答精度**：異なる役割や専門性をもつ主体（職人・デザイナー・デジタル技術等）の間で、応答がスムーズに連動している
3. **時間を超えた応答精度**：制作過程や判断の経緯が記録・蓄積され、現在もなお参照・更新され続けている

以上がすべて揃うとき、技術の力として認定する。

例：エルメスにおいて、革や絹への卓越した手仕事の技法が職人・デザイナー・経営の間で共有・連動し、200年近い制作の履歴がハウスコードとして現在も参照・更新され続けている。

6.5 歴史の力 — いまに活かせるアーカイブ

歴史の力とは、過去に蓄積された記録・形式・系譜が、現在に再利用可能な状態で保持されていることを指す。単なる保存ではなく、型・作法・制度を通じて「いま」に活かされるアーカイブである。

成立条件：

1. **蓄積**：過去の記録・形式・系譜が、再利用可能な形で蓄積されている
2. **継承**：蓄積された記録が共同体の中で共有され、現在も参照されながら世代を超えて引き継がれている

以上の2つが揃うとき、歴史の力として認定する。

例：歌舞伎において、演目・台本・演出資料が体系的に蓄積され、名跡・家芸・復曲を通じて現在も参照・上演され続けている。

6.6 知の力 — 見方・判断・ふるまいを方向づける枠組み

知の力とは、共同体の中で共有されている見方・判断・ふるまいの枠組みが、明示的に構造化され、実践を方向づけている状態である。

v0.5 では、知の力の成立条件をコンセプト・倫理・美意識の三軸に整理する。以下の3軸のうち、いずれか（または複数）が成立しているとき、知の力として認定する。3軸を統合した枠組みとして成立する場合もある。

1. **コンセプトやビジョン**：対象の捉え方・記述の枠組みが形成され、共同体の中で共有されている（例：テロワール、ヌエバ・コシーナ・バスカ）
2. **倫理**：ものごとの善し悪しについての判断が、共同体の中で共有されている（例：レシピ公開・共有の精神、素材への誠実さ・職人への敬意、知的自由・寛容、隣家への配慮・共生の作法）
3. **美意識**：ふるまい・感受・秩序のあり方が確立し、共同体の中で共有されている（例：粋・通・野暮の語彙体系、型の体系、空間の文法、テイスティング語彙）

例：ウィーンのカフェ文化において、「知的自由」という倫理のもと、異分野の知識人が対話を重ね、精神分析や論理実証主義といったコンセプトが生まれ、カフェの作法や対話の様式が美意識として共有された。3軸がすべて観測できる事例である。エルメスでは、「素材を活かしきる」というコンセプト、素材への誠実さ・職人への敬意という倫理、色彩・形態・仕上げの美意識が、ハウスコードとして3軸を統合した形で成立している。

6.7 5つの力の連関

5つの力は独立に成立するのではなく、相互に連関する。主な連結関係は以下のとおり。

力	役割	主な連結関係
環境の力	空間・風土・自然条件を社会的文脈に転化する	技術の力（素材・工程）／関係の力（制度・活動基盤）／歴史の力（場の記憶）との結合
関係の力	異質な他者との継続的な関わりから、共在と共創の場を生み出す	技術の力（分業・技能体系）／知の力（規範・教育）／歴史の力（制度・系譜）／環境の力（場・空間基盤）との結合
技術の力	対象や関係、時間を越えて応答精度を高める	環境の力（素材・空間）／関係の力（ネットワーク）／知の力（設計思想）との結合
歴史の力	記憶と制度を再構成し、継続性を与える	知の力（語り・アーカイブ）／環境の力（場所）／関係の力（制度）との結合
知の力	見方・判断・ふるまいを方向づける枠組み	技術の力（モデル・標準）／関係の力（作法・教育）／歴史の力（記述体系）との結合

表 3: 5つの力と主な連結関係

これらの連関の強さと深さが、次章で述べる結合度 C として観測される。

第 7 章 RDC 分析

7.1 RDC 分析とは

文化の力フレームでは、文化を 資源に作用が働いて力が立ち上がる構造 として捉える。RDC 分析は、この構造のどこに厚みがあり、どこに伸びしろがあるかを、三つの軸から立体的に観測する枠組みである。

- ・ R (埋蔵量／Reserve) : そもそも資源がどれだけ備わっているか。まだ力に至っていない潜在的な厚みを見る
- ・ D (密度／Density) : 資源に作用が働き、力としてどれだけ育っているか。継続性・精度・共有の度合いを見る
- ・ C (結合度／Connectivity) : 異なる領域の力どうしがつながっているかを見る

RDC 分析によって「資源は厚いが、まだ力になっていない」「力はあるが、相互につながっていない」「場としては成立しているが、その基盤になる資源は痩せ始めている」という見立てが可能になる。

文化の力は、これら三つの軸を重ねて立体的に観測される。

7.2 R : 埋蔵量 (Reserve)

埋蔵量 R は、地域や組織のなかに資源がどれだけ備わっているかを測る軸である。ここで見るのは、まだ力になっていない、潜在的な厚みである。素材として何があるか、を見る軸である。埋蔵量を見ることで、文化の可能性を見ることができる。

資源が不在だったり断片的だったりする状態から、地域や組織の基層をなす蓄積まで、0～5 の 6 段階で観測する。

7.3 D : 密度 (Density)

密度 D は、資源に作用が働き、ひとつの力としてどれだけ立ち上がっているかを測る軸である。たとえば歴史資源がそこにあっても、それを語り直す・受け継ぐ・形にする作用が働かなければ、力としては立ち上がってこない。密度は、世代や主体を越えて続くか、継続的に磨かれているかを見る。

D は 0～5 の 6 段階で観測する。

7.4 C : 結合度 (Connectivity)

結合度 C は、立ち上がった力どうしがつながり、相互に関連しているかを測る軸である。エルメスの文化、サンセバスチャンの美食、江戸の化政文化など成熟した文化を観察すると、異なる領域どうしの力のつながりから文化の力が生まれていることがわかる。

C は 0～5 の 6 段階で観測する。

第 8 章 活用の方向

文化の力フレームは、以下の方向で活用されうる。

8.1 分析ツールとしての活用

対象となる地域・組織・プロジェクトの文化の力を、資源・作用・力の構成、および RDC の観測軸に基づいて読み解く。構成パターンの比較により、対象の独自性が浮かび上がる。

8.2 設計・対話ツールとしての活用

計画策定・合意形成・関係者間の対話において、文化の力の現在地を共通の語彙で記述するための枠組みとして機能する。5 つの資源・7 つの作用・5 つの力の座標系が、異なる立場の参加者に共有の見取り図を提供する。

8.3 診断への実装

本フレームを実装した診断は、N37 の業務として実施されている。本稿で示したフレームそのものと、その運用プロセスは分離して扱われる。運用詳細は本稿では扱わない。

8.4 運用上の原則

文化の力フレームの運用にあたっては、次の原則を踏まえる。

- 文化の力フレームは、文化を **制御する** ための道具ではない
- 文化の力フレームは、文化と **応答し続ける** ための方法である
- 文化は、制御しようとするとは沈黙する

結語

本稿は、文化の力フレーム v0.5 の暫定版としてまとめたものである。v0.4 を前提に、文化の定義、D 層・C 層の構造、RDC 分析、知の力の三軸更新を主な改訂点として整理した。

文化の力フレームは、完成された理論体系ではなく、実践のなかで更新され続ける枠組みである。本稿の記述にも、定義の精度・実証事例の厚み・観測運用の標準化など、今後の改訂を必要とする領域が残されている。

本稿で示した枠組みが、地域・組織・プロジェクトにおける文化の力を読み解き、応答し続けるための共通の足場となることを願う。

参考文献

- Lowe, E.D. & Schnegg, M. (2020). Introduction. In M. Schnegg & E.D. Lowe (Eds.), *Comparing Cultures: Innovations in Comparative Ethnography*. Cambridge University Press.
- Tylor, E.B. (1871). *Primitive Culture*. John Murray.
- ブリタニカ国際大百科事典「文化」
- 小学館『デジタル大辞泉』「文化」
- 文化芸術推進基本計画（第2期）「価値創造と社会・経済の活性化」2023 年閣議決定

自己引用

- Fujino, K. (2025). 文化のカフレーム(v0.4) — 資源×作用×力と D/C 分析の構造. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.17852096>
- Fujino, K. (2025). 共鳴循環モデル 定義ペーパー (v0.3.2). Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.17431045>

付記：バージョンと DOI 情報

- バージョン：v0.5
- 公開日：2026-04-26 (2026-05-03 差し替え更新：第 8 章を削除)
- DOI：10.5281/zenodo.19784677
- 旧版 DOI：
 - v0.4: 10.5281/zenodo.17852096
 - v0.3.2: 10.5281/zenodo.17431045
- ライセンス：Creative Commons Attribution 4.0 International (CC-BY-4.0)
- 著者：Fujino, Ken (株式会社 N37)
- 連絡先：fujino@n37.jp